

備陽史探訪

受賞記念号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

広島文化賞の受賞を喜ぶ

会長 田口義之

『光陰矢の如し』、今回の受賞にあたって、先ず頭に浮かんだ言葉である。

十四年間の活動は、永かったような気もするし、あつと言う間にここまで来たような気もする。

昭和五十五年九月、昔の仲間数人と共に、神谷先生の御自宅を訪ねたのが、そもそもこの会の起こりである。当時私は福山に帰って二年目で、公私共に暗中模索の状態にあった。

何かしなければ、これが私を備陽の会発足に駆り立てた動機である。

幸いなことに、高校時代、共に史跡を訪ねた仲間も数人いたし、私淑していた神谷先生も私と同様な情熱をもっておられた。そして、翌昭和五十六年四月、結成されたのが我が備陽史探訪の会である。

こうして発足した備探の会も、そ

の当初は会員も少なく、活動も手探りの状態にあった。会の年表をひもとくと、昭和五十五年から翌年にか

けては、「史跡見学会」と題して、六回ほど福山周辺の史跡を見て歩いたことがわかる。しかし、その参加

者を見てみると五人から十人どまりで、今日の会の隆盛から見ると信じ

られない位の小人数である。だが、記憶をたどると、既にこの時期現在の会の原型ができていることに気付

く。我々の会の最大の特徴は、例え等の行事の講師・案内役を会員自身が務めることにあるが、この原則は

創立当初より守られていたのである。行事の案内役や講師を会員自身が務めるという原則は、この会の発展

にとって計り知れない程の役割を果たした。外来の有名な研究者を講師として招いたり、会長自身がそれを

務めるといふ形態は、どここの郷土史団体でも見られることである。しかし、これでは一般会員は、いつまで経っても受け身の存在で、人材も育たないし、会長がいなくなれば会は消滅するしかない。そこで採られたのが、案内役・講師を含めて行事の運営は会員自身が行うという、本会の方針である。これは成功であった。会員の中から、次々と研究者が育ち、会の中堅幹部として活躍しているのである。

また、今日の会があるのは、公開の原則を守ったためでもある。

創立当初の会は、どんな方法を採用したら仲間を増やすことが出来るか、頭を悩ましたものである。初めのうち、それは「口コミ」によった。しかし、この方法には限界があった。どうしても二〇名の壁を突破できなかったのである。そこで考えたのが、マスコミを利用するという方法であった。市役所の記者クラブに各新聞社の「ポスト」があつて、これに会の行事予定を投げ込んだのである。

最初の試みは、昭和五十七年の七月例会であつたと思うが、この方法は面白いようにうまくいった。我々のような小さな会など相手にしてくれるものかどうか不安はあつたが、

実行してみると何と新聞の紙面に乗り、集合場所に見ず知らずの人がたくさん集まっているではないか。

そして、貸し切りバスを利用した「バス例会」「親子の古墳巡り」貸し切りフェリーを利用した「瀬戸内水軍史跡巡り」など、次々に新しい企画を催して、今日の会の基盤を固めて行ったのである。

十四年に及ぶ会の歩みの中で、広島文化賞の受賞は大きな意義をもっている。「継続こそ力である」と言われるように、会が今日まで続いていることにも大きな価値がある。だが、それでは唯同好の士が集まって自分達の好きなことをやっているに過ぎない。これ以上に会が発展しようとするれば我々の活動を世の中が認める何かが必要なのである。それが今回の受賞である。換言すれば、本会もやっと社会的な認知を受けたということになるうか。

会は、今後ますます多忙である。毎週のように各部会の勉強会が開かれ、例会や郷土史講座も盛況である。また、来年の十五周年を目指して、『山城探訪』の発刊準備もこれからである。今回の受賞を励みとして、皆さんと共に、より良い会を作って行きたいと思う。

秋の古墳めぐり 下見緊急レポート

山口 哲晶

過日、中央公民館で会報編集者に
出会った。目敏く私を見つけた彼は
「会報の原稿がなかなか集まりま
んのや」、頼むさかいに何か書いて
くれまへんか、ホレこの通り」と
蠅の如く手を擦り、おまけに脚まで
擦って見せた。「器用なやつちゃな
」と内心思いながら、こんなチン
ケな芸を見せられたら書かなくては
なるまい。「駄文で良ければ」と
引き受けてしまった。

「何を書かばっても良ろしゅうお
ます」と目を細めて言う編集子の言
葉に素直に従って『私と歴史』の思
い出について書こうとおよそ三分の
二ほど筆を進めていたが、とうとう
締切り間近になってしまい、『秋の
古墳めぐり―北房町―』下見の日を
迎えてしまった。

そこで急遽予定を変更して下見の
『緊急レポート―晩秋の北房にてコ
ンビニで買った弁当を電子レンジで
チンクし、お湯をもらって作った
味噌汁を手持って定古墳を探した
ので冷えてしまった昼ごはん』を
書くことにする。お前のくだらな
い文章でこの神聖な紙面を汚すな!

との声が聞こえそうであるが、私に
は編集子から頼まれたという大
義名分があるのだからしかたない。

十月二三日、日曜日、朝八時、天
気晴朗にて肌寒し。福山駅北口から
五人を乗せて車は走りだした。国道
三十三号線を一路北房へ。最初の検
討課題は道中最初のトイレ休憩場所。
口火を切ったのはもちろん「他人の
トイレ心配七森」氏、「川上町の休
憩所あたりがいいんじゃない」
「うん、そうだそうだがそれがいい」
めでたく最初のトイレ休憩所は決ま
った。手帳に「最初のトイレは」と
書き込む七森氏。このように正し
く車中検討会は続くのである。

私の記憶に間違いがなければ九時
前には休憩所に着いた。

「バスだともう少し時間がかかりま
すからすこし長めに休憩をとりまし
よう」と「ヘビースモーカー平田」
氏。車外に出るとさむい。周りの
山々は頂をスッポリと霧に包まれ、
吐く息は白くなる。

「昼飯は大盛りの焼きソバにしよう
な」と言うと、「弁当持って来たよ」
「俺も持ってきたよ」

結局、私と網本氏だけが持ってきた
ていなかったのだ。「ま、コンビニ
もありますから」と何の慰めにもな
っていないこの言葉で「焼きソバを

たらふく食べよう会」は無視されて
しまった。「えー、寒いノ早く行
こう」と言うと、「まだまだ早いノ」

と「くわえ煙草平田」氏に無視され
てしまった。それから何の意味もな
く寒さに耐える五人であった。

やっと許されて寒い休憩所を出発
したのは九時二〇分頃であった。

車中検討会の次なる議題は「次のト
イレ休憩はどこにすべきか」である。
「北房町のトンネルを抜けた所がい
いんじゃない」

「うん、そうだそうだがしょう」

「またもや七森氏は手帳に「次のトイ
レ休憩は」と書き込み、正しく検
討会は続くのであった。

成羽のあたりまで来ると暖かい陽

射しが車中を満たしてくれる。こう
なっているとガゼン盛り上がりにつ
てくるのが「車中特別談話会」である。
「しかし、本当に七森さんはいろん
なことを知っていますねえ」

「私、マニアというのが非常に好き
なんです、何でもそんなことまで知
っているのって感じで」

「いやあ、ただ旅行が好きで、今外
国に行きたいんじゃない。とくに韓国・
中国、それで韓国の列車の時刻表を
見に大阪まで行ったんでえ」

「ひゃあ〜ノ」
「思やあ、旅行好きが歴史好きにな

ったと思うんじゃない。貨物列車の時刻
表もあるんでえ」

「ひゃあ、ひゃあ〜ノ」

「うまく時刻表を使うて、ゆっくり
遺跡や資料館を見学して日帰りした
のは東は名古屋、西は熊本じゃな」
「ひゃあ、ひゃあ、ひゃあ〜ノどお
してそんなことが出来るんですか?」

網本氏と七森氏の会話は続く……
話題は時刻表から本へと移っていく。
「中国に行ったとき本屋に連れてい
ってもらって店の人に漢代の歴史
について書いてある本を全部だして
くれ」と言って段ボール箱一杯買い
ましたよ」

「すげえ〜、何冊かちょうだい?」
二人の会話は私は沈黙を守った。

「ウーム、なんと奥の深い趣のある
会話じゃ……」
二人の会話を聞くに及び私は思っ
た。七森氏に『時刻表マニア』の称
号を与えよう。英国の「ナイト」ほ
どの権威はないだろうがあげる。彼
は厭がるだろうが絶対にあげるのだ。
そうこうしているうちに第二トイ
レ休憩所に着いた。小さく汚らしい

感はあるが生理現象には勝てないとい
う自然法則により一応候補とする。
「最初に行く大谷古墳にもきれいな
トイレがありますよ」と網本氏が言
う。どうやら先程の七森氏との会話

で網本氏も七森氏の境地に到達されたい。やたらとトイレにこだわるのだ。

大谷古墳に着く。詳しくは当日のお楽しみだが、とにかくスゴイ。この出土品展示場所を聞くために「ふるさとセンター」に向かう。

人気のないセンターに入ると初老の方が出迎えてくれた。なんとここが資料館になっていて、環頭大刀やら陶棺などが展示されており、当日の見学を申し込んだ。私たちが展示物を見ていると、平田氏がニコニコしながら「当日の昼食をここでさせてもらうようにお願いしましたよ。昼敷きなんですよ。おまけにお茶も出してくれるそうだし……」

後でわかったことだが平田氏は昼食に異常なほどの執着をもっている。おそらく東京時代にひどく貧しい暗い日々を送っていたに違いないのだ。

さらに、定古墳で出土した金モールが『古墳めぐり』当日には里帰りしているの教育委員会に連絡してみてくれとのことだった。それで教育委員会の電話番号と担当者の名前を書いたメモを私が預かった。幾度か電話したことのあるらしい網本氏がそっと私に「若いきれいな声の女性ですよ」と教えてくれた。

玄関をでて車に向かっていく時、

そのことを平田氏にしゃべったら、なんと、私の前を歩いていた平田氏がクルリと向きを変えて私に近づき「ほんと?」と言ったと思うとメモはスルーと彼の手に移動していた。顔に卑猥な微笑みを浮かべていたのはもちろんである。

教育委員会の場所を確認してようやく昼飯にありついた。昼間しか開いていないコンビニに入って食べ物を物色する。「こういう所に入ると落ち着きますねえ、こういう所が大好きなんですよ」と網本氏。手には早速昼飯を買い込んでおり、シズと店内を徘徊されている。品物を見る視線は揺るぎなく、さらに店内に溶け込んだあの姿はまさしく、『コンビニマニア』と密かに自負されているのかもしれない。

ようやく昼食となり、定古墳にてとることにした。ただ、網本氏も焼きソバを買われており「冷えて油っぽくなった焼きソバをささやかに食べる会」が開会出来たことに感謝する次第である。

昼食後、定北古墳、荒木前方後円墳を確認して下見を終了した。帰り道「若いきれいな声の女性に弱い平田」氏の案内で賀陽町清水寺裏山祭祀遺跡を見学して帰福。それから、各々夕暮の雑踏の中に消えていった。

財団法人広島文化振興基金より 「広島文化賞」受賞 十月二十九日 受賞祝賀会開く

地域の文化の向上・普及に貢献のあった県内の個人・団体を表彰する「広島文化賞(賞金五〇万円)」をわが備陽史探訪の会が受賞した。受賞理由は次の通り。

一、昭和五年の創立以来、城郭・古墳・歴史民俗の三つの研究部会で、福山地方の山城跡・古墳の調査研究を中心に活動を続け、地域文化の発展につとめている。

一、研究成果は機関誌『山城志』としてまとめ、現在までに十一集を発刊。広く一般にも公開してきた。

一、毎年、こどもの日には「親と子の古墳巡り」を実施。昨年は開催十周年を記念して記録誌『古墳探訪』を出版した。

一、各部会が企画、講師を担当し、毎月一般を対象に開く郷土史講座等は多くの参加者があり、幅広い議論が交わされている。

一、岡山県、広島県を中心に年七回のバス例会・徒歩例会、年一回の一泊旅行を実施。地域の歴史文化の学習につとめた。

これらうけ、受賞祝賀会が十月二十九日、福山市内のワシントンホテルで行われた。

祝賀会には、岩崎弥寿弘氏(福山市教育委員会社会教育部次長)、上杉博美氏(広島経済同友会福山支部長)、藤井軍三郎氏(福山文化連盟会長)、河相典男氏(財団法人・義倉理事長)、木原弘氏(福山リビン・グ新聞社・常務取締役)の各来賓に、関係者、会員ら約七十名が出席。

席上、田口会長は次のように挨拶。「高校時代、サイクリングで古城跡や古墳を巡るグループ『ユースド・マップ・クラブ』を九名で結成したのが備陽史探訪の会の発点です。その後、進学等があつて中断、昭和五年に再開。福山を中心に周辺部にまで歴史研究の輪を広げようと、だれの発案ともなく『備陽史探訪の会』の名称が生まれました。それから十四年、いづしか会員数も二百名も越え、ここに『広島文化賞』を受けて喜びは大きいですが、同時に大きな責任を感じています」

その後、来賓各位から「今後、地方文化発掘に大いに期待する」と強調された。

祝宴をはりながら、祝いの舞いや歌などで二時間の祝賀会はなごやかなうちに幕を閉じた。(事務局報告)

もやい船

佐藤 秀子

暗い雲が空を覆い、今にも雨が降りだしそうな夕方、ひっそりと、あたり一面冷たい霧漂う朝、いつやむとも知れないしのびやかな雨が降る昼下がり、わたしの好きな情景。

野山へ出かけるのでもない限り、わたしは晴でない天気が好きだ。雨が降る前の風や雲の動きは、みていてわくわくするし、濡れた石や土それに草木、建物、あらゆるものが、しっとりと生気をとり戻してくる。かわいたアスファルトの上にまばらな点だったものが、やがてあちこちに飛びかい、跳ね、踊り、透き間をうずめ、水となって流れてゆく。雨の最初の一滴を手を受けてみる。

今年ほど雨に恋した事はない。

水をいとおしく思い、とても大切に扱った。彼らにとっては感いだっただろうが、それとも勝ちほこった笑いだっただろうか。ふだん、もの言わぬ者たちにも心があることを、はつきりと思ひしらされた。

橋から見おろした川の水は、深く考えこんだ秋の色だ。暗く濃い緑の水面下には長い年月の間に上流から押しやられてきたものが累々と積み

重なって、人間と同じように夏のざわめきから離れて熟考中だ。岸には、からすやさが魚をついばんだり足跡を残して歩いている。歩道へ続く竹林や大きい樺の木、それぞれに酷暑への別れを告げ、待ちかねた季節に、ゆっくりと体を預けている。

義経の書を見るのは初めて。すつきりと大きくさわやかな字である。

一一八四年(元暦元年)高野山領が他寺の所司に横領された為、当時京都で頼朝の代官として京・西国のことを成敗していた義経へ訴えたことに対する返書であったが、「子細を承知しました。証文は明白であると確認しました。早く取り計らい、鎌倉の頼朝へ事由を申し入れましょう。治安が乱れているので、神社寺院は、お困りのことと思います」と、とてもきめこまやかで、やさしい文であった。義経は最近の説によると背もあまり高くなく美男子でもない……と言われているが、もう一通の文にも同じ様な誠実さとやさしさが感じられて、この四ヶ月後に頼朝に討たれなければ歴史はどうなっていただろうと八百年前の書をじっとみつめ続けた(ちなみに、この書は国宝)。

いつ迄も生き続けて欲しい。展示は平安から鎌倉への特別展。

他にも安芸国壬生荘(山県郡)の地頭が非法を働く為、所当官物が滞って困るので地頭職を停止するという清盛の下文や一一八七年(文治三年)に高野山で供養する為の費用として(備後国太田荘(甲山他))を金剛峯寺に寄進した、後白河院御手印(手形が文中に六ヶ所押してある)起請文に、田口会長から聞いたことのある地名があらここにあり、身近に感じられた。

清盛に対しては、やさしさを感じたことはなかったが、大輪田泊(神戸港)を作る時に港の波浪をふせぐ目的で、入口に一切経を石の表面に書写して沈めたことあり、それが人柱を立てるかわりの措置と知って、たった一枚の文書が彼に対する見方を変えてしまった……裁判の証拠物件にも似た新しい発見。ここに足を運んだことを感謝しよう。

やはり国宝の僧円位(西行)書状。日前神社造営の為の木材供出が高野山金剛峯寺に課せられていたが、清盛に頼んで他にまわしてもらった、高野山には三十年近くいたと記述にあり、力も持っていたのだなと改めて見直した。書体は静かだ。

珍しいものでは土佐派による平家物語の下絵。これは名場面を絵にする時の構想を字もいっしょに書きこ

んだもので、所蔵は京都市立芸術大学であった。来月には京都にゆくし、息子の友人が在学しているので、案内してもらうことにした。秋は特別展示もあるので楽しみ。

武田二十四将展は、十二将と山本勘助の鎧が飾ってあり、汗と戦さの匂いの染み込んだ魂は山梨からの長旅を、いや四百年を過ぎこれからは続く旅をいっただいどこで終えるのであろう。山本勘助所持の太刀。彼が握った刀身が今ここにあることの不思議、時の流れとは、いったい何だろう。果して今迄、止まったことはなかったのだろうか。

上杉二十将に甘粕近江守景時という武将がいた。川中島合戦で抜群の働きをしたとあり、端正な横顔が描いてある。甘粕大尉の祖先であろうか。辻潤が好きで、その妻から繋がる大杉栄との関係が、忘れられない名前を思いださせた。ぼんやり本棚にもたれてみると、どこからか尺八の音が聞こえてきそう。悲痛な彼の魂は蘇り、やさしくしてくれた友人の子供達の家を回ってゆく。「辻潤の本?買ってゆく若者いますよ」古本家のおじさんの言葉。

ああ、遺したものでしか会えない人達、限りなく増えてゆく会いたい人達、秋は想いつの季節である。

ちよっと気になること

今村 武美

一、檀君陵墓

九月初旬の読売新聞に、ちよっと気になる記事が載っていました。核疑惑に揺れる北朝鮮が、平壤に檀君の陵墓を造営中で、七月に死去した金日成の墓も近くに造る予定ということでした。写真入りではありませんが、小さな記事に目がとまったのは、丁度その時に、金両基著『物語・韓国史』を読んでいたからかも知れません。檀君とは、日本でいえば神武天皇の様な存在で、朝鮮建国の始祖と語りつがれてきた人(或は神)です。高麗の僧、一然が著わした、『三国遺事』によると、天孫、恒雄と熊女の間に生れ、BC二三三三年十月三日に即位し、国の名を朝鮮と定めたとあります。退位して山神になった時の年令が、一九〇八歳(一説には一〇三八歳)とありますから

実在の人というより神話上の事と考えた方が、妥当のようです。しかし朝鮮(南北を含む)では、西暦に二三三三年を加えて「五千年の歴史と文化」と誇る時の論拠としています。日本で皇紀二六〇〇年というのと、よく似ていますね。

又、その後建国された諸王朝(百濟、高句麗、新羅等)の始祖達も檀君の子孫と称し、ついには、朝鮮民族のどれもがその子孫であるかのようになっているといったいます。檀君神話は、その後も朝鮮民族の心の奥に生き続け、民族の存亡が問われる激動期にはかならず姿をあらわし、民族意識を高揚させる牽引力になってきたといえます。

朝鮮民族にとっては、それほど大事な檀君神話ですが、この時期に敢えて、檀君の陵墓を造るという記事に何かキナ臭い物を感じます。北朝鮮は、現在、国際社会の中で孤立し、核疑惑に関する記事は、連日新聞紙面を賑わしています。又、経済的にも破綻し、国民の日々の食料にも事欠くと言われています。国際政治でいきづまった時に、神話を利用して民族意識を高揚させ、国民の関心を都合の良い方向へ向けるのは、権力側の常套手段です。日本でも、明治二十三年に、神武天皇をまつる檀原神宮を創建したのを手始めに、明治神宮や平安神宮が造られて、富国強兵のシンボルとされていったのは、歴史の記憶に新しい所です。北朝鮮の政府や軍部が、妙に舞い上がって核ミサイルの発射などというような事態のこない事を願います。

二、韓国旅行から

八月四日から七日の三泊四日で韓国へ行ってきました。せっかく本郷に、広島空港が出来たのというところで思い立ちました。釜山、慶州、ソウルと駆け足で見えてきました。もつと時間をかけて見たいと思う所が何ヶ所もありましたが、或る旅行会社のパックツアーへの参加ですので仕方ありません。もし次の機会があれば、自分でコースを組んでみたいと思います。

中でも印象的だったのは、慶州の古墳群とソウルの国立中央博物館でした。慶州はさすがに新羅千年の都だっただけに、市内と近郊には、新羅の王や王妃や王子の陵墓がいくつもあります。大陵苑と呼ばれる古墳公園には、大小二十余基の古新羅古墳が密集しており、直径百mを超す古墳でも、日本の古墳のように樹木が繁っているようなことは無く、芝生に覆われてまことに奇麗なものです。とくに、天馬塚は公開施設を設けて、内部構造と遺物の出土状態を復元し、発掘当時の状況を一般に公開しており、積石塚古墳の内部がよくわかります。

天馬塚や皇南大塚等の古墳出土品は国立慶州博物館に展示されています。博物館の中庭に、無雑作に並べ

られている石仏の顔がなんとも味わい深く、しばらく眺めていました。ソウルの国立中央博物館は、旧朝鮮総督府として建てられたものです。建物としては立派なものですが、場所や建てられた経緯から、近々とり壊されるようです。展示物は素晴らしく、百済室や伽耶室の出土品を見ていると、やはり朝鮮半島は日本列島の兄貴分だと思えます。

旅行の事はさておき、最近、韓国の考古学の成果は、目を見張るものがあるようです。特に、伽耶地帯の発掘は日本という任那の正体に迫るものだけに大いに注目されます。

近い将来、朝鮮半島が平和的に統一され、高句麗関係の遺跡が調査、解明されれば、日本は、教えを乞いにかねばならなくなるかも知れません。宮内庁が管理する、二百四十余りの天皇陵や陵墓参拝地が調査、発掘されれば、そんな必要も無いと思うのですが、専門の学者でさえ立入が認められない現状では、嘆かわしいといふ言ひ様がありません。誰が葬られているか分からない古墳を、勝手に〇〇陵と称して祭礼を行っているとしたら、これ程失礼な話しは無いと思うのですが！

民話

松岡 正

むかし、東の村へ行く道の、東村との境にサイの神がありました。

ところが、その道を広げることになり、工事中はサイの神を東の村に預けました。工事は済みましたが、サイの神は東村に残ったままでした。十年ぐらい前から、サイの神があつた部落で若後家さんが増え続けました。最近では十数軒にもなりました。皆は不思議がりました。そして、サイの神のたたりではないかと思うようになりました。

そこで、皆は相談して、サイの神の分霊をもらって自分たちの八幡さんに祀りました。それからは若後家になる人がなくなりました。

この話の前半は最近、万能倉(福山市駅家町)で私が耳にしたもので、末尾の分霊祭祀は私の創作である。

東の村とは旧上岩成村(御幸町)のこと、『御幸郷土史』(館上昇著)を見ると「万能倉は古来、才の神と言われていた。上岩成分に菜の神を祭っていたが、明治四十年に今宮神社(上岩成)に合祀された」との記

述がある。私は冒頭の話を民話発生の原形とみる。

万能倉のサイの神のあつたという場所から道(万能倉バス通り)をへだてた所に「左ハかみがた道」「右ハふくやま道」と刻まれた古い道しるべが北から南へ流れる溝のほとりに立っている。むかしは、その溝より東は深津郡、西は品治郡であつた。

次の話は、上岩成に伝わる「正戸山のゆるぎ地蔵」という話である。

ある武士は新刀を手に入れたが、切れ味を試したくなつた。夜道、武士は女とすれちがった。武士は抜き打ちで女を斬った。女は肩から地面にくずれた。すると、ガタガタ何かゆれ動く音が、はつきり聞こえた。よく見ると、近くに安置された地蔵さんが、台座の上で左右にゆれ動いていた。武士は道にはいつくばって、ひたすらわびた。すると地蔵は「わしは言わぬ。汝いうな」とつぶやいた。

二十数年たった。ある居酒屋で何人かの侍が、酒のさかずに自分の腰の業物を自慢しあつた。老武士が、かつて試し切りをした女のこゝとを口にした。話が終つたとたん、顔色をかえた若武者が姿を消した。

老武士は一人、帰途についた。正戸山のふもとの地蔵さんの前で帰ったとき若武者があらわれて「親の仇。覚悟」といって老武士を一撃に討ち倒した。

これによく似た話が『芦田町散策』(内田重徳著)に出てくる。

むかし、上有地の久蔵という極道者がいた。侍と喧嘩して殺し、上方へ逃げた。数年して久蔵は故郷に帰ってきた。途々、古地蔵があつた。久蔵は「侍を殺したことは知られないように」と地蔵さんにお願ひした。地蔵は言った。「わしは言わぬ。自分も喋るなよ」二、三年後に久蔵は三、四人を相手に大ゲンカを始めた。久蔵は、「わしは侍を殺したことがある。お前等のうじ虫の一匹、二匹は物の数じゃない」と、大タンカを切った。それが、役人の耳に伝わって、侍殺しの罪で久蔵は打首、獄門になった。

この話の題名は「久蔵ともの言う地蔵」となっている。久蔵は実在の人物らしく、その生涯は『続備後叢書』の中の「西備天の升かけ」の項に載っている。ただし、これには地

蔵の話はでてこない。これらの二つの話を、私はある出来事を民話化するための、石地蔵にしゃべらせるという一手法の伝播とみる。もちろん、いずれが先か、私には判らない。

『備陽史探訪復刻版』は面白い。談論風発、多士済々である。その中で、桑原完二さん(駅家町法成寺)の記事(第二七号)が目に入った。題は「斎藤実盛塚の由来」で、末尾に「実盛虫送り行事の由来はどこからくるのか」と疑問を呈しておられる。私は次のように聞いている。

斎藤実盛は出陣のとき、老いて髪に白いものが交じっていた。戦場で討ち死にを覚悟した実盛は、老醜をはばかって、白髪を黒く染めて出陣したという故事がある。他方、稲に虫がつくと、白く立ち枯れになる。

そこで、実盛の故事にちなんで、村のわらべが幟や鐘をもって、盛夏の一日、「実盛殿、障りなく、お通りあれ」といった意味の言葉をお口に唱えながら、村境のサイの神まで行列した虫送り行事が、むかし、行われていた。

これは民話ではない。習俗と呼ばれる分野のものであろう。

民話には不思議とユーモアがある。

それは遠く離れた童心をくすぐる世界である。民話は民話として、素直に味わうのが本当の読み方かも知れない。

よそに咲け

高野の奥の 女郎花

其角

歴史民俗研究部会講座

『古事記』を読む

前回は冒頭にある有名な「天地初発」の解釈と古事記の世界観を中心に学習しました。

次回は、いよいよイザナギ・イザナミを始めとする、私たちに馴染み深い神々の登場です。

どなたでも参加できますが、準備の都合がありますので、希望者は平田さん(〇八四九一二三三七八)までご連絡下さい。

△実施要項▽

日時 十二月一日(土)

時間 午後二時から

毎月第二土曜日の同じ時間帯に開催

場所 中央公民館二F視聴覚室

講師 神谷和孝名誉会長

平田恵彦副会長

テキスト代 一〇〇〇円

(岩波文庫ワイド版『古事記』)

資料代は一〇〇円程度。

吉備の古代祭祀を探る旅

坂井 邦典

九月十一日、七時四五分。集合時間に合わせて福山駅北口に行つて驚いた。

同行予定の我が仲間が顔を合わすや否や、もう全員がバスに乗り込んでいて、補助席を使つても座る場所がない、一日中立つたまま旅は出来なから、我々の仲間八人は行くのを止めようと、いわれたのである。備陽史探訪の会は、皆さんがこんなに熱心な方ばかりの集まりであることを知り、二度びっくりさせられた次第である。

すったもんだがあつたが、田口会長の交渉の結果、乗鉄バスの車庫まで行き、廃車前のバスというものの、まだ十分使える別のバスに乗り代えて、全員何とか座り、今日の旅行は始まつたのであつた。

同行者の平均年齢は七〇歳で、その中に我が仲間の二三歳の兄ちゃんと十二歳の女の子が混じっているのが異色であつた。

まず、磐岩神社に到着。古来より巨石信仰があり、山の上の大きな岩があるところに神を祭るものであることを知った。神は大きな岩、巨木、

水に宿するという古代人の考えがあることを教えてもらった。

また、大岩の後方に木野山神社があり、その「磐境」という環状列石について説明を受けた。一見何のへんてつもない石群が、こういう意味を持っているのかと感心した。後に続く小高い山には、毛利氏が安芸守山城を築いていたということである。

次に行ったのは玉島の補陀落山円通寺である。良寛が二一歳から二〇年間もこの寺で修行したことと有名。あいにく法要があり、方丈が建ててある千畳岩を見られなかったのが残念であつた。詳細な地図つきの資料を見ながら境内を巡り「童と良寛像」のある山頂に登つた。そこから一望できる玉島湾の「水島の渡り」での源平合戦は、平家が大勝した唯一の戦である由。

倉敷埋蔵文化財センター見学では、発掘調査のやり方、出土物の保存方法など、展示物を見ながらの説明を受けて、またまた知識が豊富になった。ライフパーク内の他の施設も見学しなかったが、時間がなくて残念。

すぐ隣にある福田公園で昼食。薄曇りで暑くも寒くもなく、緑の芝生の上での食事は遠足を思い出しで大変楽しかった。

石洞神社は鷺羽山スカイラインの入口より登つたところにあつた。

坂の途中に巨石の積み重ねがあり、古墳と考えられる由。この神社は別に天岩門別保布羅神社というむずかしい名前がついている。神社の正面に「釈塔様」という高さ二・二mの塔婆が祭つてある。平安時代の作と推定され、どこか他の場所に建ててあつたのをこの場所へもつてきて祭つたものだろうと説明された。神社の境内に仏塔が立っている例は多いが、社殿の軸線上正面に立っている例は国内ではここだけであるという。由加神社と瑜珈山蓮台寺。

神仏混淆のため両方が祭つてある。江戸時代には金毘羅参りの途中、この瑜珈山権現参りを「両参り」として合わせて行つたので、門前町は大いに繁栄したとのことだ。入口に備前焼の大鳥居と狛犬があり、珍しかった。境内も広く、建物も沢山あり、多宝塔も立派であつた。日本中の大名が大借金で四苦八苦していた天保時代に、よくもまあこんな見事なものを作つたものだ。池田藩の実力は大了なものだと感心した。折から蓮台寺客殿が修理中で円山応挙の襷絵(重文)を見学できなかったのが心残りであつた。

拝殿入り口の天井に大きな磁石盤

が取りつけてあった。どうしてこんな所へこんな物がつけてあるのか不思議である。特別な意味はなく、奉納してもらったものの場所がなくて天井へ着けたのだろう。帰路は厄除けの石段を降りた。お金を入れる箱が各々の段に置いてあるが、不況の世の中を反映してか、お金は入ってなかった。代わりに般若心経を書いてた丸い小石が入れてあった。

熊野神社と五流尊瀧院

この二つの神社は六棟の建物が軒を接して建ててある。それぞれ建てた年代が違っているのが面白い。また、菊紋の中に「一」の字がついているのが特徴である。

三重の塔は文政三年建造で、大きく姿がよい。幕末にこのような見事なものが造られたことに感心した。この塔は熊野神社の敷地内にあるのに五流尊瀧院の所有である。

山伏というものは急峻な山岳と関係があるはずなのに、遠く離れた岡山の平野に五流もの山伏の総本部があることに疑問を感じたが、この地がかつて熊野神社の所領であったとの説明を聞き、納得できた。

また、後鳥羽上皇の供養塔は、確証がないようであるが、実物を見て説明を聞くと本物であるという感を強くした。

一八時二〇分、福山駅に無事到着した。私は備陽史探訪の会の旅行へ初めて参加したが、詳細な資料を作って下さり、実地において熱心に懇切丁寧な説明をして下さるので大変勉強になった。もっと早くからこの会へ入っておればよかったと思うている。

古墳研究部会

第九回古墳講座

今回の古墳講座は、「天皇陵古墳を考へる」と題して、畿内の天皇陵(陵墓参考地)に治定されている古墳について学習します。

西殿塚古墳(手白香皇后の衣田陵を中心とした大和古墳群や、行燈山古墳(現崇神天皇陵)・渋谷向山古墳(現景行天皇陵)を核とした柳本古墳群、あるいは箸墓を代表とする纏向古墳群など、ヤマト王権の基礎を築いたと考えられる大王墓を中心に最新情報を学びます。

八実 施 要 項

日時 十二月三日(土)午後七時

毎月第一土曜日に開催

場所 中央公民館2F視聴覚室

講師 山口哲晶・網本善光

(古墳研究部会部会長・副部会長)

費用 資料代 一〇〇円

一泊旅行に参加して

神在月に遙かなる

古代のロマンを求めて

森田 嵩子

秋も本番を迎えた九日、十日。雨の心配の全くなかった今年の夏から初秋でしたが、どうやらこの二日間はいくもり空の様子で、雨さえ降らなければ、絶好の探訪日和です。

「備陽史探訪の会」と表示されたバスは、いつものように立派なもの。四十五名の参加者全員が揃ったところで出発。

そこで会長の挨拶。開口一番「広島文化賞」受賞の報告。前回の例会でお聞きしてはいたものの、広島での授賞式の模様は、緊張と喜びが一杯で、もし同席していたら、壇上の会長が誇らしいの一言です。これも今までの熱心な会の運営の証です。

私の様にまだ一年もたない会員にさえ、その喜びはすばらしくうれいものです。ほんとうにおめでとunggざいました。

さて、お昼には早くも大山につき、弁当もそこそこに大山寺へ。紅葉には今一つでしたが、最初の探訪地、足取りも軽く登りました。

天台宗の古刹、山号は角盤山。本尊は地藏菩薩。平安期から修験道場

として多くの行者が入山したと言われる立派なもので、中国地方最大の寺院として栄えたとの事。文化財も多く、これからも大切に守られることを心から祈りたいと存じます。

大神山神社奥宮は神仏習合のころは杜僧がいて、本地仏が置かれ、大山権現または大智明権現と呼んでいたのが、明治八年、現社名に改称したものだそうです。

それから淀江町(上淀廃寺跡・向山古墳群)に向いました。

ここでは淀江町歴史民族資料館の副館長からくわしい説明を受けました。この方も探訪の会の方と同じ様に、一つの石や礎石を見ただけで、とても大きく大きな建物や住んでいた人、使っていた道具類まで想像に及ぶロマンのわかる人なのだと感心致しました。

今はコスモスのゆれるのどかな田舎の一角という所なのに、七世紀〜八世紀の頃には海に面していたといひます。朝鮮半島との交流もあったのか、金銅製冠や本州では唯一とされる石馬が出土したり、奈良法隆寺金堂壁画と同じ様な壁画が出土しており、法隆寺を思わせる程の寺院が建ち並んでいたのでは?と夢は広がります。

礎石の大きいにはおどろきまし

たが、その礎石を見ただけで、あれほどまでに立派な構成想定図が出来てしまう事も、私の様な初心者にはおどろきです。それがきつとこの学問おもしろさなのだろうな、と皆様の目の輝きの不思議さを見た様です。続いて向山古墳群へ。前方後円墳七基、円墳四基、方墳一基が五世紀と七世紀にかけて形成されたと推定の由。山陰第一の古墳の密集地となっているそうです。

かなり疲れた足取りとなり、もう今日の見学は終りか、とささやきの聞こえるバス内でしたが、ラッシュ時にもかかわらず、和鋼博物館へは閉館まぎわの四時半になって到着。

今までの古い時代の掘り起こしから、うって変った現代風な博物館の佇まいに少し緊張感がはぐれた所で、たたら製造過程を見学しました。

いよいよ待望のお宿。千鳥荘はよほどひどい所という説明は、先入観の反動なのか、そうでもないよ、到着時間が遅れた分冷めてしまったり、水分がぬけるという細かい手落ちはあったものの、遅れたんだから仕方ないわね、素材はなかなかよくておいしいお料理なのよ、と気持ちもゆったりなごやかな宴会でした。

早朝から興奮と感動の連続で、温泉上がりの身体には穴道湖にうかぶ

灯の静けさとはよい風に、いつの間にか朝を迎えてしまうほどでした。十日、八時出発にも明るい顔が揃い松江城へ。慶長一二年、工事に着手し、同一六年に完成した、城主堀尾吉晴自身が工事の指揮をとったというこの城、天守閣の遺構は山陰唯一といえます。

桃山時代初期の特徴である「木造化粧造」で、黒の下見板張りの外壁などを持つ貴重な文化財。望楼様式を加えた独立天守で、外観五層、内부는六階。実戦本位で安定感があり、無骨な体裁ながら、壮重で雄大な手法を随所に見る事が出来る立派なものでした。

八重垣神社参拝。

神魂神社での説明を受けながらも、荒神谷遺跡へ気持ちにはやり、八雲立つ風土記の丘での広々としたながめもお弁当も上の空、ポツポツ降り出した雨も何のそのでした。

待望の荒神谷遺跡では傘を持つての細道でしたが、おどろきよりも不思議でした。どうしてこんな所にと。昭和五九年、全国の弥生時代銅剣の総発見数をはるかに上回る三五八本の銅剣が整然と並べられて一度に発見。しかも、翌年夏には僅か七メートル離れた所で銅鐸六個と銅矛一六本が同時に発掘されています。

このことは出雲に巨大な勢力が存在していたことを裏付ける証と、くわしい説明でしたが、どうしてこんなところにとという素人の疑問には納得の行かないもので、これからの調査が楽しみです。

三刀屋城址。本格的な雨の中、三刀屋川沿いに位置する丘陵の尾根に構築した郭群は、東西に長く、雨にけむる中、立派に聳えていただろう日々を想像しました。そしてここが最後の探訪地になりました。

係の方たちには下見の段階から大変だった事、ありがたく感謝致します。楽しく有意義な旅が出来ました。

中世を読む会

第九回

『備後古城記を読む』

毎回、約二〇名の会員が参加する。備陽史探訪の会で最強の学習会です。中世の備後の武将と山城に興味のある方はぜひご参加下さい。

八実施要項

日時 十一月一九日(土)午後七時
☆十二月は特別郷土史講座・忘年会と重なるため休止します。

場所 中央公民館2F視聴覚室
テキスト代 千円(既購入者不要)
座長 出内博都(城郭部会部会長)

福山文化財講座開講!

『福山の中世』

「福山の中世社会を広く市民に認識してもらい、もって郷土理解の一助とする」ことを目的に、福山文化財講座が開講することになりました。田口会長が講師として登場。皆さんのご参加をお待ちしています。

第一回

日程 平成六年十二月三日(土)
時間 午後二時～四時
講師 志田原重人

演題 中世瀬戸内の社会と民衆

第二回

日程 平成七年一月二二日(土)
時間 午後二時～四時
講師 田口義之

演題 山城の時代
(山城を通して福山の中世を見る)

第三回

日程 平成七年二月四日(土)
時間 午後二時～四時
講師 田口義之

演題 乱世の群像

(故郷の武将の興亡)
*会場 県立歴史博物館講堂
*聴講料 無料

主催 福山市教育委員会
共催 広島県立博物館

速報『私の好きな歴史上の人物』 集計結果発表！

先日お送りいただいた「私の好きな歴史上の人物」アンケートの結果が集計できましたので発表します。また、何人かの方には、電話インタビューでコメントをいただきました。

返信総数 一二九通中

三名(以上)記載 八二通

二名記載 七通

一名記載 十一通

無回答 二九通

△ベストテン発表▽

第一位 織田信長 十八票

神原正昭さん

中世のしがらみや古い価値観を全部ぶち破ったところが痛快で、ええのう。やった事、一つ一つの善悪はもちろん別じゃが…。

第一位 坂本竜馬 十八票

岩下千枝子さん

自由奔放で行動的、それでいて一本筋が通っている。そういうところに男性的な魅力を感じるわね。それに女性に対する接し方がとても素敵。優しいけれどベタベタしてないの。

第三位 徳川家康 十二票

縄稚光雄さん

幼い時から人質にとられながら、隠忍自重を続けて最後には天下を取り、その後の三百年の礎をつくった。じつと我慢、我慢の生き方は、私の人生とも重なる部分があって、本当に共感を覚えます。

第四位 西郷隆盛 十一票

中山博子さん

あんまり詳しくないんですよ。ただ、テレビで『翔ぶが如く』を見たときの印象が強くてね。引かれるのは、清貧の中で、家族を捨てても国のことと思い、行動したことかしらねえ。

第五位 毛利元就 十票

門田保雄さん

「三矢のたとえ」がええ。それが毛利の両川を始めとして、子供らにちゃんと伝わったということが大切なんよ。戦国の世を見事に生き抜いて最後には幕府を倒したんじゃないから。

第五位 小早川隆景 十票

内田伊勢夫さん

筑前名島城主として赴いた時、善政をしいたろう。戦火で焼失した神社や仏閣を修復したりして。それに、お忍びで家臣を訪ねて激励してな、

「三原の黄門さん」ともいわれとる。まあ、わしらの郷土の英雄じゃな。

第七位 豊臣秀吉 九・五票

平川寿水さん

一介の庶民から、あそこまで上りつめることができたのは権力欲だけじゃない。人間的魅力にあふれていてたからよ。人から愛されるということとは大切だし、いつの時代もいっしょ。私も見習いたいと思うとる。

第八位 空海(弘法大師) 八票

三谷尚克さん

小さい頃から「お大師さん」として馴染み深いでしょう。今は日本で最初の思想家として興味があって、好きというより、むしろ多く知っていた人物という気持ちでいます。

第八位 聖徳太子 八票

高橋辰己さん

女房と二人でいろいろ相談したんじゃが、やっぱり、日本の国家としての基礎を築いたけえのう。政治に仏教を取り入れたり、十七条の憲法制定した功績も大きいと思いますが…。

第十位 吉田松蔭 七票

橘高秀樹さん

大学が山口県ということもあって長州ファン。薩摩とか竜馬とかいう人もいるけれど、近代日本をつくった原点は松下村塾にあると思う。とにかく松蔭が育てた人材がすごい。

結果を元に匿名座談会を開催。

題して「アンケートを斬る！」。

A パツと見て感想はどないでつか？
B 一位から四位はほぼ順当だと思う。全国でやっても、たぶん同じ結果が出たんじゃなかな。毛利、小早川が仲良く五位。この辺は地元ならではのことだね。

C そりゃああって当然。鹿児島なら西郷さんが一位に決まっとる。

B 秀吉が七位で家康より下なのは意外。それに九・五票というのは？
A 木下藤吉郎までしか認めへん、いう人(末森さん)がおったからや。大閤はんの晩年は確かに褒められたんやないで。

D 結局、それがミソをつけたわけね。備陽史の人は歴史に詳しいから。

C わしやー、聖徳太子や空海がベストテンに入るとは思わなんだで。
D そうそう、私も。時代的にも遠いし、身近じゃない気がする。

C 以前は聖徳太子と仲ようなりたがったもんじゃがのう。

☆笑い。

A 宗教関係は少のうで、法然、親鸞、蓮如が各二票で、一休さんは一票。雪舟、西行、円空も一票やけど、こりやどっちかいうたら芸術家や。日蓮、道元、栄西はゼロやし。

E ほかあ、高杉晋作が入らんのだの

が悔しゅうて、悔しゅうて。

☆E氏、思わず机をドンと叩く。

Aここで個人的な嗜好を出ささんといて下さい。

B十位の松蔭も入って不思議じゃない。むしろ票数が少ないくらい。

こうしてみると、やっぱり戦国と幕末の人が多い。

Dだけど、女性が一人も入っていないのが残念だね。

Aえーと、女性で一番多かったのはなんと卑弥呼／四票。次が清少納言の三票。二票の紫式部、巴御前、お市の方、ねねと続いているんやけど、これ書いたんはほとんど女性

の会員さんやね。一票では小野小町、北条政子、乃木静子、津田梅子、それに少々変わったところでは、中島政子さんの、荒木村重の妻だし、いうのもありましたわ。

Dねねや乃木静子は妻の鑑。小野小町や津田梅子は女性の憧れね。

C十位以下はどうなっとるんや。

A楠正成、六票。宮本武蔵が五票。四票が卑弥呼、武田信玄、清水宗治、水野勝成。三票が清小納言、伊達正宗、真田幸村、高杉晋作。

二票、一票はぎょうさんや。

E晋作が三票しかや。

C勝成公が四票というのは少々寂しい気がするが…。

D清水宗治は意外と集めたわね。

Bこういうのはテレビや歴史小説が大きいね。勝成にしたって、もし、司馬遼太郎や吉川英治が採り上げていたら全然違うと思うよ。『鬼日向参る』とかいってね。

Dちよっと／あなた、全部見せなさいよ。

☆編集A氏、一覧表を広げる。

Bへえー。面白いもんだね。

Cわしのは、みんな一票じゃの。一票の人はな、人とは違うぞという、その人の思い入れがあるんじや。

D単に変人なのかもヨ。

Bだけど、一票だけの場合、その票を通してその人がなんとなくわかるような気もするね。

Aたとえば、どんなでつか？

Bロレンスの網本さん。なぜロレンスなのか、それは網本さんだからと、こういうことになる。

Eわかったような、わからんような。Dでも、投票でその人がある程度見えるというのはあると思う。正直に好きな人物を書くのは恥ずかしいし、私も書くの少し迷ったもの。

Aでも、大元さんみたいに「よくぞ聞いてくれました」と書いてあったのもあったんやけどなあ。

B人それぞれということだね。自分の事を多くの人に知ってもらいた

いという人もいるし、そうでない人もいる。で、大元さんは誰を書いた？

A宇喜多直家であつけど。

☆一同沈黙。

Cわしが目に付いたのは、熊谷さんの高倉天皇、中村副会長の三浦道寸じやな。なるほどと思うな。

☆中村さんにはコメントがついています。「三浦半島で五〇〇年続く名門。北条早雲に新井城で討たれたときの辞世の歌がふるっている。『討つものも討たれるものもカワラケよ砕けてのちはもとの土くれ』か」

他にもコメントが書いてあったのは多田さん。小野新四郎について「存在は小さいかも知れませんが、郷土に関係があり、調べてみたいと常日頃から念じています」

また、赤松さんは乃木希典(二票)について「戦争は好きではありませんが、正義と誠実さは武人No.1だと思えます」とありました。

Eほかあ、ハンニバルとかアレキサンダーとかは思いもよらんかった。D私もカタカナの人は浮かばなかった。無意識に日本の中だと思うわ。

A書いたのは佐藤秀子さん、視野が広いということやろか。

Bそれはそうと、大久保利通の一票

は、西郷さんと比べて少ないね。

Dあなた「西郷さん」といったけど、「大久保さん」といわなかったでしょ。親しみが無いのよね。

E晋作が少な過ぎるノ

C人気投票じゃけえのう。

D私は、藤井忠夫さんの木曾義仲や今井兼平に共感を覚えるわ。「主従二騎になって宣いけるは」のあたりの『平家物語』も好きだし、巴御前もあげてくれてるし。

B個人的には勝海舟にもう少しほしかったな。

Eやっぱり晋作じやが。

Cところで、無回答の二九通はどうなんじやろ。

A返信なしが七〇通近うありまっさかい、それをよせてもろて、まあ、百通やな。

B約半分か。やっぱり、こういうアンケートには抵抗があるのかな。

Eじゃが、逆にいやー五割の回収率というのは、高いんと違う？

Aでは、このへんでいちおうお開きにしまひよ。皆さん、次回はおつと返信して下さい。お願いします。

☆その後も侃々諤々、話は延々と続き、大いに盛り上がりしました。匿名登場人物が誰かは皆さんのご想像に。勝手に実名を使わせていただいた方、広いお心でご容赦下さい。

荒神谷の埋納は なんのためか

柿本 光明

列島に取りのこされ、数千年の間ほとんど大陸との交渉がなかった日本は、弥生時代を迎えてにわかに活発な対外交渉を展開した。

外洋を渡って、中国漢時代の文化は続々と日本列島に到来し、また朝鮮半島の諸族ともさかんに交渉をもった。そのころ、日本は倭とよばれ『漢書』地理志などの中国史書にも、漢などとの交流が明記されている。

倭は、ようやく東アジアの歴史に登場した。縄文時代のつぎの弥生時代を特徴づけるものに、稲作の発展と金属器(青銅器および鉄器)の使用およびその製作がある。そうした背景にはアジア大陸の動向があった。新しい文化がアジア大陸から伝播したのみでなく、朝鮮半島や中国大陸から渡来してきた人々があった。とりわけ朝鮮半島からの渡来の波には注目すべきものがあった。

従来、近畿を中心とする銅鐸文化圏と北九州を中心とする銅矛・銅剣・銅戈などの文化圏と対比されてきた。しかし最近の考古学的研究の成果によれば、単純にこれを文化圏の対立などとはいにくくなっている。

島根県・荒神谷遺跡で、それまで全国で出土した総数を超える三百五十八本の銅剣が見つかって十年。銅剣発見の翌年、すぐ隣から銅鐸六個と銅矛十六個も出土。弥生社会を見直し、教科書を書き換える大発見となった。弥生時代の金属器は、青銅器と鉄器であった。装身具やその他の器具に青銅製品を用いた例もあるが、日常の利器として青銅が使われた例は少ない。銅鏃・銅矛・銅剣・銅戈などの武器類は、銅鏃以外のものは実用の武器からしだいに祭器化していった。

荒神谷遺跡の「銅鐸・銅矛埋納」と「銅剣埋納」の違いなどを分析してみると、どうも一世紀後半(弥生後期)に近畿や九州に出雲勢力が対抗し、四国まで含んだ独自の政治圏をつくろうとして挫折したのではないかと、いう大胆で魅力的な仮説が生まれてくる。六個の銅鐸は、早古式や次段階のものなど年代差があり、かなり使用された跡のあるものや、あまりないものなどバラバラである。銅矛も新旧の形式など年代の差があるなど同様である。

銅鐸は近畿、銅矛は九州のシンボルとされているが、それぞれ近畿や九州で製作されたものを、出雲へ持ち込まれ、周辺の集落で使われていた

ものが集められたものであろう。

一方、銅剣は対照的で、出雲型ともいべき独特の形式ばかりで、ほとんど使われた形跡がない。そしてこの形式の銅剣の出土地は島根・鳥取に集中している。たった一本ずつであれ、遠く離れた香川と高知で出土しているのを見ると、出雲集団が独自の政治圏をつくろうと、中・四国の諸集団に配布するための銅剣を用意したと解釈できる。

出雲集団は、ある時期には近畿・九州と結びついていたが、自我に目覚めてそれらのシンボルの剣を配布しようとした途端、近畿や九州などの反撃を受けて断念せざるを得なくなったのではなからうか。

出雲の祖先神を祭ったという仏經山を望む荒神谷で、再期を期し、先祖神に敵からの防衛を祈願。剣の多くは柄の部分にX模様が刻まれており、剣の靈魂を結びとめる紐の象徴で武人をこの地にとどめたいとの願いが込められている――。

北九州に始まった弥生文化は短い歳月の間に瀬戸内海や日本海を経て東進し、近畿以西の西日本一帯に波及していった。日本海側で丹後半島までが第一次波及の東限だった。

近畿の銅鐸文化が九州に及んだとする見方もあるけれども、これまで

のように二大青銅文化圏の対立などと断定できなくなったことはたしかである。また、広島県安芸福田出土の銅鐸と、剣形祭器・九州型戈形祭器のように、あるいは島根県鹿島町佐陀本郷出土の銅鐸・剣形祭器のように、銅鐸と銅剣・銅戈とが共存する例もある。

銅剣・銅矛・銅戈は本来青銅の武器であって、朝鮮半島からも数多く出土している。それらを模倣してつくられた日本列島の銅剣・銅矛・銅戈は、非実用的な青銅武器形祭器ともよぶべきものへと変貌した。

銅鐸の祖型を朝鮮半島の小銅鐸に求める考えも有力化しつつあるが、それも日本列島では新しい銅鐸へと発展し大型化した。

銅鐸や銅剣、銅戈の祭器化の背後には、弥生時代におけるまつりの展開を推測させる。それがどのように埋納され、どのような祭に用いられたか、まだまだ検討すべき課題が残されている。古墳時代になると、こうした青銅製の祭器が姿を消していく。銅鐸などの銅剣・銅戈の埋納が終りを告げたその理由はいったいなんであったか、荒神谷遺跡の埋納もなんであったか、そこにもさまざまなケースが考えられる。それは新しいまつりごとの顕現では……。

米原へ移住して半年 山城を歩いております

末森 清司

備陽史探訪の会、広島文化賞受賞おめでとうございます。会長を始めとして会員の皆様の努力の賜物と申します。一会員として私も嬉しく光栄の事と感じ入っております。会の今後の発展に益々弾みがつく事でしょう。私にとって残念な事は祝賀会に仕事の時間の関係上参加できなかった事です。さぞ盛上った事でしよう。まずは御祝いを申し上げます。

滋賀県米原町に來住して半年、土地に慣れましたかと、問われますとウーンと首を振ります。やはり三原の方が暮らし易いのです。米原は生活の物価、食料品などが三原と比べると三割以上も高いのです。野菜も果物も。

それと職場以外に知人がいない事。何とか近づこうと思ってもなかなか出来ず、コミュニケーションの場もないのです。よって我ヨメハンは今もって三原へ帰りたいとボヤいております。可哀相と同情しつつ生活の為ガマンしてくれやと言ってますがネ。何が嬉しいかと言われますと、広島からの便りだそうです。何しろこちら広島の新ース、何も伝わら

ないですからね。アジア大会も何かヨソの都市でやっていたのかと私も思いましたからねえ。年をとると望郷の思いは強くなるのでしょうか。幸いな事に、米原は三原よりも空気が良く、長い事毎日苦しんでいた職業性気管支喘息が収まって元氣になりました。空気と水、職場環境が良くなったからでしょうか。その代償は家計が毎月赤字でピイピイですがネ。まあ、三度の飯とお日様がついて廻ってくれてますので一日、一日を大切に暮らす様心掛けております。もう人生みじかい様ですのネ。

私の住んでいる所は交通の要所です。車・電車共に便利です。京阪神・名古屋・北陸、一時間半内です。これをうまく生かせぬ事にはこの地に來た意味が無いとばかり、あつち、こつちと車を走らせていますが、何しろ休みは日曜日のみ、祭日は関係なしの六日間勤めの為に連休が無く、遠出が出来ぬのが残念です。

まあ欲張らず日帰りで、歴史に登場する史跡巡りを唯一の楽しみとしてヨメハんと二人で車を走らせております。

山城好きの私の事、この地方は天下乱の舞台となった城が多く、楽しい思いをしております。自宅から八キロ、車で十分足らずの所、彦根

ですが、石田三成公居城跡佐和山があります。遺構は徳川の為とことんこわされて、わずかに曲輪・土塁・千貫の井が残る位ですが、何度登っても涙をさそいます。三成公とここで戦い敗れた一族及び家臣とその子女達の事を思うとです。

地元の方も三成公の治世が良かったのか、慕う人が多くおられ、石仏を造りまつてその徳を今もって伝えておられます。百とも二百とも言われる多くの石仏が佐和山にあるとの事ですが、これは土地の人が三成公及び一族家臣の靈をなぐさめ、その徳を偲んでいる証しとの事と、地元の古老の方がおしえて下さいました。

この彦根、井伊家の居城彦根城があり、その立派なたたずまいは見事です。私は佐和山城跡の方に強く心を動かされます。

そして天下分け目の関ヶ原。自宅から一五キロ、車で二〇分弱の所。

全国の大名が集まったと言われる古戦場跡。早朝、霧がたなびき人家が見えぬ様な時にここに來ますと、当時の様子が何となく頭にうかびます。中でも三成公の陣所と大谷吉継公の陣所はいい知れぬ感情が出て来て涙をさそいます。家康公の陣所、小早川秀秋公の陣所もみて廻りましたが、

やはり敗者の陣所に心をうばわれます。各大名の陣所中、三成公の陣所が一番良い所にあった様です。小早川が裏切らなければ……との思いがします。

この関ヶ原町全体が史跡の様な感じで、一日では廻れず、バイクを走らせてあちらこちらを探索しない事には面白味がありません。時間をかけて楽しむ為に、計画を立てて廻ろうと考慮中の所です。

小谷城跡、浅井長政公居城跡、織田信長公の妹お市の方が嫁入った城、そして兄に亡ぼされた城ですが、この城跡も見事。規模は私の好きな高山城より大きく、郭・曲輪・空堀・土塁・堀切・石垣・井戸跡など山城の遺構がしっかりと残っております。

ありがたい事には気楽に登れてじつくりとそれぞれの遺構をしっかりと見学出来る事です。私は四度も五度も登っていますが、佐藤の錦士さんと二人で登った時は楽しかった。彼も楽しそうにあちこちを走り廻っていました。ウーンと言って、やっぱり大きい、の一言は今も頭に残ってます。山城の探索は相棒の錦さんがおらん事には面白味が出てこない、いつもそんな思いをしています。錦さん、安土城の隣にある観音寺城跡をみたら何というだろうなあ。

山頂の遺構の広さ、積まれた石垣の大きさに声をあげるのでは……。ぜひ又彼とゆつくりこの山城を探索したいと願っているのです。では又皆様お元気で。

『織豊城郭』のご紹介

末森さんのいる米原周辺は山城の宝庫で、この地の山城研究は全国でもトップレベルです。

来年の一五周年記念講演会には、山城研究の全国的権威、米原在住の中井均氏をお招きしますが、氏が所属しておられる「織豊期城郭研究会」からこの九月に『織豊城郭』が上梓されました。

末森さんから備陽史探訪の会の皆様にも是非にとのお勧めがありましたのでご紹介します。掲載論文は、中井均「織豊系城郭の特質について」木戸雅寿「安土城出土の瓦について」など一七編で、読み応え十分です。

定価 三三〇〇円

(送料・手数料別途 四四〇円)

申込方法 郵便振替口座

名古屋〇〇八二〇一五一四四八〇

織豊期城郭研究会

郵便振替口座に送料・手数料を添えてお申込み下さい。一〇日前後でお手元に届くそうです。

熊野町へのお誘い

黒木 日出人
(熊野文化連盟)

来る十二月四日、徒歩例会「熊野町の史跡巡り」を田口会長とともに担当することになりました。そこで、お誘いの意味を込めて、皆様に史跡巡りの「予告編」をお送りします。

古墳やその出土品から、熊野町には、遙か古代から人々が住んでいたと思われまふ。中でも「平形銅剣」が昭和七年(一九三二)、熊ヶ峯山麓にある熊野神社境内の裏山から発見され、県の重文となっています。

このように遺跡が豊富な地域ですが、例会では、中世以降の史跡を中心にご案内することに致しました。

◎一乗山城跡

黒木城または七面城ともいわれ、水源池の南、標高二四〇mの山上にあり、昭和三九年、福山市の史跡に指定されています。初代城主は渡辺越中守兼で、文明末年(一四八七)ころ築城したと伝えられています。ただ、最近の研究ではやや下り、永正年間(一五〇四～一五二一)説が浮かんでいます。

見所は、城前・城背の大堅堀と横井戸(今でも水を満々とたたえています)でしょう。

◎常国寺(広島山定親院常国寺)

日蓮宗京都本法寺末寺で、文明の末、一乗山城主渡辺越中守兼が久遠成院日親上人を招じて開基し、自家の菩提寺としました。且つ、三山田全戸をことごとく当寺の檀家に改宗させ、同時に三村の神社仏閣いづれも当寺の末寺末社と改めさせ、さらに改宗に肯んぜざる寺院や檀徒は他村へ移転させました。

寺内をご紹介します。

①「唐門」(将軍門ともいいます)

元禄年間(一六八八～一七〇三)の再建のようですが、鏡板の桐紋薄肉彫りは安土桃山時代の作といわれています。

②「鐘楼」水野玄蕃の母が施主となつて元禄年間に建立。

以上三点は市の重文です。

③「番神社本殿」小社ですが、元禄期の様子をよく伝える社殿です。

以上三点は市の重文です。

④「馬止まりの五輪塔」元は軍端(原)にあったといわれています。

⑤「渡辺家累代の墓」常国寺本堂裏に「黒木城渡辺氏歴代坐城」と書かれた場所に、七基の五輪塔と一基の擬宝珠石柱が立っています。

⑥「將軍塚」常国寺の裏山に足利義昭將軍の墓というものが、これを將軍塚と称しています。戦前は高さ三〇cm角の土台の上に、宝

篋印塔が立っていましたが、戦時中に大阪から疎開してきた子供達が足利は国賊だといって塔を谷へ落とし、未だ発見されていません。

⑦「寺宝」曼荼羅・古文書・仏像・経巻御書・古器物と数多くありますが、中でも注目すべきは、宮近門が日親上人から頂戴したと伝えられる「三幅対」です。立派に表装された掛軸三本はいずれも上人自筆で、極めて重要なものです。

一幅は、天台大師円頓章と称される天台教学の奥旨を伝えるものでこれは市の重文に指定されています。もう一幅は法華経要文。最後の一幅は十界大曼荼羅本尊で、これに日親上人の花押とその左側に

宮近門民部左衛門尉
藤原信定法名定親

授口(欠字)

文明十八年 大才十月
丙午十月

と書かれています。このほか市重文になっているものに渡辺民部少輔元の「白傘袋毛氈之鞍覆免許状」「真木島玄蕃書簡」があります。

⑧「渡辺家累代の座像七体」開山堂に祀つてある渡辺家累代の座像は、後面注記の法名から、越中守兼・信濃守常・出雲守房・源三高・民

部少輔元・四郎左衛門景・勘左衛門太であることがわかります。

◎軍端(原)古戦場

『備陽六郡志』には次のような記述があります。

中山田村のところに、下山田と当村の境に左常國寺右山南道という題目の石塔有。此辺を軍原という。路の辺りに人家の藪の内に首塚という塚有。小計松林有其内に四角なる土手の形に残れり、是「人升」という。

これは『福山志料』巻二十三にも引用しており、「人升」とは、多数の死者を葬った所の意で、千人坪ともいいます。今は田んぼの中に小さい無縁墓石が一基立っています。

私は昭和六三年頃、田口会長から

宮近門の位牌が、新市相方の本泉寺

(住職平田智昭代)にある旨知らされ

れました。その後、町内郷土史部会

有志とここを訪れ、位牌をお拜ませ

てもらったところ、相方城主合同位

牌の表に「高顔院殿定親日妙大居士」

裏に「高 文明十八年十月十三日

宮禁門左衛門尉藤原定信(信定の逆)

山田軍端打死……」とありました。

渡辺氏入部以前は山名一族がいた

らしく(甲谷城か甲谷奥城)、『水

野記』には、香(光)林寺に寺領寄附したことや、この寺に山名氏石塔があった田記載されています。これらのことから文明一八年(一四八六)

軍端の戦いは、山名氏対宮氏の争いではなかったか……と推定しています。

◎宮近門藤原信定の墓

下山田字坂根の金持寺観音堂山腹に古い墓石群があります。そのうちに一番大きく整った宝篋印塔があり、二段の組石の上に基壇・台座・塔身と乗り、梵字があるらしいのですが、判然としません。上の屋蓋の隅飾突起はやや反っており、最上の相輪は宝篋部分が欠けています。以上の特徴から室町時代のもので推定されています。

このほかにも小型で不完全な宝篋印塔が三基と五輪塔が数基あります。以上が案内の概略です。

結ひ 日親上人・常國寺寺宝の十界大曼荼羅・宮近門左衛門藤原信定・軍端古戦場・本泉寺位牌が横糸、一乗山城城主渡辺越中守以下一族・常金寺・頼幕府が縦糸で、それぞれがつながり、郷土の史跡探訪にいつも楽しさを与えてくれるものと確信しています。十二月四日、皆様にお会いできることを心待ちにしております。

小川久志の歴史 ウォークに参加して

岡本 貞子

九月二十四日、その日も朝から残暑きびしく、汗の滲む暑さだった。

総勢五十名もいたであろうか。新市駅から十時出発。先ず宮一族の居城であった本住寺裏山の龜寿山城跡到着。今はわずかに石垣の断片が点在するのみである。

その昔、宮一族の城下町であった新市は、経済流通の拠点として物資が集まり市座が繁栄して、古市・北市・新市と行政割りしなければならぬ程の膨張振りであったそうである。

もし、毛利方との合戦で破れていなかったならば、当時の福山とは比べくもない程の力があり、経済力があつたらしい。

田口会長から指摘されて、長い変遷の歴史とは面白いものだなと歩きながら感じた。

続いてかの有名な桜山慈俊公の菩提寺、中興寺へ参詣する。われわれも歴史で教わった楠正成公とかかわりを伺う。

南朝に味方した正成は大変な智将で、わずかな手兵を用いて数倍の敵

に対し、幾多の策略で戦ったが、敵の大軍を遮るために、正成公討ち死と諜報機関に流布させた。折り悪しくその頃、正成公と心を一にする備後桜山慈俊公側の密使が、その流言を赤坂本陣まで問い質さぬまま、仰天して立ち返り、その旨上奏したので、われに利あらずと覚悟を決めた慈俊公は、吉備津神社に引き揚げて火を放ち、一族自刃したと伝えられている。

この吉備津神社は、延喜式にも現れる格式高い「一宮」の称号を献されている。神社の運命にも浮沈はあったが、神社に対する慈俊公の遺志は立派に貫き通されて、幾世を経た今、現在の大伽藍に現れているといえよう。

古の歴史をそのままに、後ろの山から大木を渡る風の音は、神さびて昔を偲ぶに十分であった。

静寂な境内に点在する朱塗りの献燈、入学・交通安全祈願の絵馬など、所狭しと結び付けられている風景は、現代のものである。

今を生きる自分と、その上七百年を重ね合わせて、とても厚みのある一日であった。

田口会長に、もっといろんなお話を拝聴したいと思う今日この頃である。

万能倉地名考

出内 博都

「愛国駅から幸福駅へ」縁起をかついで、好字の駅名のキップを買うのがブームになったことがあります。福山から万能倉までのキップはこうした愛好家には、魅力あるものだったといえましょう。

福山は近世にはいつて、新たに城下町を作る時にできた地名で、由来については色々ありますが「福」という字にはのきな望みを託したことは、いぬめない事実だろうと思います。

さて、万能倉を「マナグラ」と読むことは、初めての人には、かなり難しいと思えます。勿論、文字は後世に好きな字をあてたものでしょう。では、ここで「マナ」とか「クラ」とかいう言葉が何を表すものか考えてみましょう。

古代には「マナ」という語に、新鮮な魚・神聖な魚という意味があり、「クラ」には山とともに谷を表す意味もあります。備南平野が氾濫原であった頃、新鮮な水の流れるこの地域は、神に供える神聖な魚のとれる「聖」なる谷だったのではないでしょう。

この地域のすぐ東隣にある上岩成に、稲月という地名がありますが、これは「いな」という魚がとれた所という伝承があることと照らしあわせて私には興味あることの一つです。

次に自然地名の方では「マナ」は崖地を意味する言葉でもあります。現在の地形では崖地など想像もできません。自強高校の下にある池が、小豆池とよばれていますが、「あずき」という語も崖地や崩れ地を表す語です。

こうしてみると、加茂町に続く山の尾根は、不安定な氾濫原の平地に對し、人々の暮らしにとって、敵しいけれども大切な土地だったのではないでしょう。

また、万能倉の地名の由来を考えると、倉という文字に着目して、多くの倉があったからだという説がなされています。しかし、何のため、どんな倉があったかということになると、簡単にはいかならないと思います。

古代の倉という場合、普通、国衙の正倉、郡衙の倉、更には駅（きやく）の倉などが考えられますが、今のところ、どれにも該当しうにありません。しかし、正倉院に代表されるように、官設の倉庫または倉庫群敷地の一区画を院（いん）（院倉・正倉院）と称した事

があります。

当初、諸国に置かれた倉庫が失火によって「合院焼尽」する例があいついたため「今より以後新に倉庫を造るは各相去る十丈以上」と定められ（延暦一〇年＝七九一）、さらに郷ごとに分散されるようにと改令されたのです（延暦一四年＝七九五）。現存する正倉院は東大寺の正倉ですが、大和盆地では条里地割の坪名「クラノマチ」が正倉に對應する場合が多く、加茂町にある「クラノマエ」というのも、これらと関係があると思います。

また、九州では、毎年の租税を各地の倉院にいったん納め、のちに国衙から太宰府へ移して京進させたため、郡家（ごほけ）とは別に多くの院が設置されました。ここに租税の出納を管理する院司が置かれ、やがて郡司と對立したり、自ら郡司と名乗る者まで現れました。

なかでも薩摩・大隅・日向の三国では、郡郷と院との混同が著しく、院（その地域）は郡郷と對等の領域ないしは私的な荘園的存在となりました。これらの院名は人名・地名としてのこっています。この付近では、岡山県の鴨方町にある「六条院」や広島県の「因島」などが、その名残ではないでしょうか。

こうしてみると、郡衙・駅家以外に公的な倉庫が設置されていたことがわかります。倉について古代にはどのような解釈をしていたか、少し探ってみましょう。

『古事類苑』居処部に倉庫名称として、次のような説明をしています。

（倭名類聚抄十 居宅）
倉庫 唐韻云、倉圓日。困。去倫反、……兼名苑云、困一云庫。力檢反、久良一云與奈一云伊奈倉也、……藏二穀物一也。
（箋注倭名類聚抄）

唐韻云、力檢反、倉有屋曰庫。萬呂久良、一云伊奈久良（略）

（松尾筆記）

倉庫 按に、万呂久良は圓倉にて困庫などの字を訓べし、與奈久良は米倉也、伊奈久良は稻倉也、久良は倉庫にて總名也。

以上は中国語の音韻字を知らない私には読めませんが、困は丸い穀物倉、庫は米蔵という注釈がなされています。普通、郷倉というのと、近世の制度といわれていますが、律令制のもとで郷ごとに倉院を置いた記録もあります。

『日本後記』延暦一四年（七九五）九月一七日の条に

毎レ更建二倉院一之状下二諸国一畢、追尋二此事一頗乖二穩便一、今須下彼此相接、比近之郷、於二其中央一同置中一院上、村邑遥阻、絶隔之處宜下量二地便一毎レ郷置上レ之。とあり、輸送・流通の不便な時代に種々の状況に対応するため、公的な倉院がつくられたものと思います。こうした観点でみると、万能倉は山陽道に面し、後世の広域石成荘の中心であり、安定した耕地の広い地域で、最適の場所だったと思えます。この観点に立つと「マナグラ」というわかりにくい言葉も、やや落語じみてきますが、「マログラ」という円形の「ヨナグラ」という米倉があった処、ということになりはしないでしょうか。

古代は中世とちがって、文字の使用が厳密だったようです。倉と蔵は「類聚名義抄」に

倉。蔵也、蔵二穀物一也。

とあり、大体同義語ですが、庫については、天文本『倭名類聚抄』に庫 唐伝云。諸軍器在レ庫（音椅、豆八毛乃久良）、皆造二棚閣一とあり、穀物倉と武器庫とを区別しています。万能蔵のあて字はあっても、万能庫のあて字がないのも、こうした歴史事情を反映していると思えます。

各地に倉にまつわる伝承をもつ地名がありますが、これぐらい古語を忠実に伝えた地名も少ないといえましょう。

以上、万能倉の地名について考察しました。同時代の古文書か倉庫の遺跡でもない限り断定はできませんが、地名を考える一つの材料になればと思います。

次々と会に依頼が...

事務局連絡

「広島文化賞」受賞後、各方面より、備陽史探訪の会に対する様々な依頼が増加しています。

会としても地域の文化活動を興隆させていくためにも、これらにできる限り協力していきたいと思えます。具体的には、会の行事以外でも重要なものがあれば、会報や案内でお知らせするようにいたします。

今回、つい先日一泊旅行で探訪したばかりの斐川町文化課や、福山市商工会議所等から会長のもとに書籍販売の依頼が届きました。以下ご紹介いたします。

◎斐川町からの依頼図書

ふるさと探訪

①巨木・名木巡り

②築地松と民家

五〇〇円
六〇〇円

③まつり 八〇〇円

④染めと織り 一〇〇〇円

ブックレット（荒神谷遺跡）

①なぜ埋められたのか 六〇〇円

②だれが埋めたのか 六〇〇円

③どこで作られたのか 六〇〇円

④荒神谷と神話 七〇〇円

⑤荒神谷遺跡と耶馬台国 七〇〇円

文化の史跡を訪ねて 一〇〇円

遺跡分布調査報告書 二〇〇円

斐川歴史を語る会 六〇〇円

講演記録集1

◎福山商工会議所からの依頼

『戦略上から見た福山城』 西本省三著 一〇〇〇円

◎福山文化連盟からの依頼

『福山 風と土と人6』 福山文化連盟編 一〇〇〇円

◎備後出版情報センターからの依頼

『びんごむかしばなし』第一・二巻 各一三〇〇円

月刊雑誌『びんご』 三五〇円

購入希望者は事務局まで

ほとんどの書籍は、会の様々な行事の際、販売いたします。ただ、斐川町の書籍については、予約一括購入になりますので、希望者は事務局までご連絡下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

収入の一部は会の活動資金になります。できるだけ協力下さい。

神在月に遙かなる
古代のロマンを求める旅にて

赤松雅子

秋天の丘に登りて廃寺跡

往時の栄華想いつつ

夕あかね湖にうつして残照の

つかの間の赤秋の暮

宍道湖のしじみ取る船晚より

うかびて竿をあやつりぬ

荒ぶ神須佐之男様も八重垣の

壁面に見ればやさしけり

敗荷に秋の惜めば曇り来し

出雲の謎は謎のまま

平成六年十月九・十日

会報六三号の原稿募集

『備陽史探訪』六三号（二月中旬発行予定）の原稿を募集します。内容はまったくの自由です。

字数は「氏名とタイトル」は別で、本文を「タテ一六字×一〇〇行」以内で書いて下さい（厳守）。

締切りは平成七年一月末日です。来年度から会報は年六回発行になります。ますます身近なものになります。力作をお寄せ下さい。

至福の時に座して鎮魂

石井 良枝

第四十一回式年遷宮
遷宮の儀 平成六年十月十九日
午後八時齋行

千載一遇—平城京から平安京に遷都されてから千二百年を迎えた今年の秋—私は至福の時を迎えました。

賀茂別雷神社(通称上賀茂神社)・賀茂御祖神社(通称下鴨神社)御両社から、正遷宮・奉幣祭御斎行に当り参列の案内が届けられたのです。

平成三年の秋、賀茂大神を祀る神社相互の研修と親睦交流を目的として、全国賀茂社連合が結成されました。以来、春の葵祭・秋の「賀茂皇大神御神威景仰祭並丹塗矢大願成就祈願祭」に氏子総代・崇敬者と共に参拝を続けて参りました。

また、格別の猛暑だった八月五日・六日には、第二回全国賀茂社連合夏期研修会が広島で開催され、原爆死没者供養行事、原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典にも他の賀茂社の皆様と共に参列いたしました。

こうして度重なる親交の中で導かれ、御両社からの特別の御配慮を得ることになり、この度は娘を随行して参列させていただきました。

賀茂別雷神社

御祭神 賀茂別雷神 一柱 一基

二の鳥居の前で受付を済ませ、手水の儀を終え、所定の座に正座して時を待つことしばらく、虫の音がしきり。ふと望月の夜だと思いました。

目の前の社殿には御簾が降ろされており、所々に灯されたかすかにゆらぐ燈火を受けて人の気配を身に感じながら時を待ちました。

次々と齋行せられる祭儀は、すべて笏を打つ音を合図に始まり進められます。参進される勅使・官司以下所員の白砂を踏み音、床を歩く足音だけを覚えていきます。

すべての燈火が消えました。淨閑。瞬間と思えた時の間—遷御。

そして御神体が入御されました。その時、最奥の高く黒い本殿の高欄と、階が真白く照り渡り輝き、樹々を通り過ぎる風が冷たく感じられました。

いつしか御簾は巻き上げられ、再び燈火も明りて、御神宝・御服もすべて奉納され、二十一年目ごとに厳修される遷宮の儀は終わりました。

—午後九時二〇分—
明けて十月二十日午前十時齋行。

奉幣の儀(御幣物を勅使が奉獻しておこなわれる奉祝の祭儀)。

二の鳥居を入り、穢渥社殿の所定の座に着き修祓を受けます。白木の小さな矢が、目の前の奈良の小川に流れて行きます。

祭儀は進み進んで、勅使が橋殿南階より昇殿され、中央に敷かれた厚畳に座し、御祭文(宣命)を奏上せられます。御祭文は、賀茂祭独特の紅紙に書かれています。ちなみに伊勢の神宮は縹紙、他社は黄紙に書かれるしきたりとが。

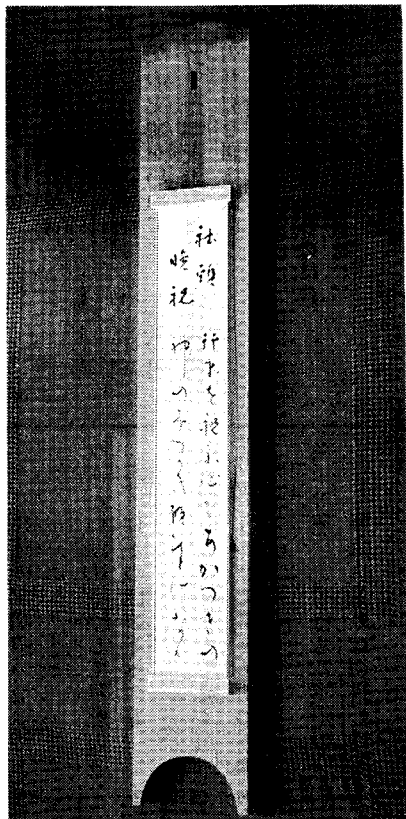
やがて勅使は本座に復された後、玉串を奉り拝礼。続いて官司玉串を奉り拝礼。権官司以下、特別参列者も拝礼。合わせて参列者一同で拝礼します。

東遊 陪従の歌集に合せて六人の舞人により二曲を奉納。

神域の内でする祭儀をすべて目のあたりに拝し得た歓びと感謝は名状しがたいものです。

引続き齋行された饗膳の儀の後、直会の席では、丹後国一之宮の官司様と話す機会を得、また、随行員の方々と共に全国の賀茂社の弥栄を三唱いたしました。

永い年月をかけて成し遂げられた遷宮の諸祭が、今後も厳修されることの有難さが、私の人生の途上のひとつの結びと出発になることを信じて帰途につきました。



★孝明天皇御製「杜頭曉祝」

第三十三回式年遷宮御斎行に際し、御製の瑞籬御造替につき、御古材を以て記念の短冊掛を謹製いたしました。平成六年九月 正遷宮の日。

—奉幣祭参列者への撤下品—(右写真)

賀茂御祖神社

御祭神

玉依姫命(東殿)
賀茂建角身命(西殿)

平成六年九月に斎行された、賀茂御祖神社の式年遷宮について書かれた文章がありますので、こちらにも皆様に紹介します。

「紉の森顯彰会 会報」第十九号
第三十三回式年遷宮特集号より。

「東庭下御のこと」

行末を 祝ふ心も あかつきの
神の瑞垣 願ひとけなむ

右は明治大帝の御父君である第百二十一代孝明天皇の御製である。帝は徳川幕府を説諭されて荒廃した御歴代の陵墓を補修せられる等、若き日の明治大帝に敬神崇祖の實を親しくお示しにられた。(中略)

文久三年十二月十二日、第二十八回式年遷宮を御斎行になり、正遷宮当日孝明天皇は勅使として正親町大納言實徳卿を發遣せられ、定刻には特に御思召により御引直衣を召され清涼殿に出御せられ、「東庭下御」という鄭重な御拝礼をあそばされたのである。

冒頭の御製は、その翌日に詠まれたものである。

山城調査再開!

「山城探訪―福山の山城三〇選―」の測量調査が再開されます。年内の日程は次の通りです。

①十一月二〇日(日)

調査城跡 大場山城(本郷町)
集合場所 松永駅北口
集合時刻 午前九時三〇分
担当 田口義之さん

〇八四九(五三)六一五七

②十一月二七日(日)

調査城跡 鷲尾山城(尾道市)
集合場所 松永駅北口
集合時刻 午前八時三〇分
担当 山口哲品さん

〇八四九(四五)六一七三

③十二月十一日(日)

調査城跡 的場山城、掛迫城
集合場所 明王院駐車場
集合時刻 午前八時三〇分
担当 出内博都さん

〇八四九(五五)〇五三五

④十二月十八日(日)

調査城跡 笠岡城
集合場所 笠岡市役所前
集合時刻 午後一時
担当 網本善光さん

〇八六五六(三)二〇七八

☆初心者の方の参加大歓迎。ただし山歩きのできる格好で参加して下さい。

事務局日誌

八月二十日(土) 第六回「備後古城記を読む」参加一五名。

九月三日(土) 第六回古墳講座「吉備の古墳総めぐり」参加一五名。

古墳測量図の資料がどつきりもらえて、思わずにんまりする。

九月一〇日(土) 事務局会議。バス例会の資料作りと今後の打ち合わせ。参加一三名。

九月十一日(日) バス例会「吉備の古代祭祀を探索」参加五七名。

矢野さんと中西さんは車で参加。最初、バスに全員乗れないと聞いて呆然とする。が、すぐにバスを交換して出発し、結果オーライ。

九月一七日(土) 東広島市で「県史協大会」開催。会を代表して田口会長、中村副会長ら五名が参加。

同日、第七回「備後古城記を読む」参加一六名。

九月二四日(土) 第七回郷土史講座「『古事記』成立の背景と意義」講師神谷名誉会長。参加三一名。

久し振りに神谷先生の熱弁を聞いたという会員も。

九月二五日(日) 役員会。参加九名。

「広島文化賞」受賞祝賀会、忘年会、来年度行事の打ち合わせ。

一〇月一日(土) 第七回古墳講座

「出雲の古墳総めぐり」一泊旅行の予習。今までの最高二〇名参加。

一〇月八日(土) 栄えある「広島文化賞」授賞式。田口会長が会を代表して出席。藤田県知事から賞状と賞金(目録)を贈られる。

同日、第一回「古事記を読む」を開催。参加一八名。中世を読む会や古墳講座とは、また一味違った会員が参加。定着することを祈る。

一〇月九日、一〇月一〇日(日・祝) 初日は連休中日で渋滞に巻き込まれる。千鳥荘の宴会は大いに盛り上がり、カラオケマイクは奪い合いに。酒量も増えて、支配人いわく「こんなに飲んだ客は初めてだ」

一〇日午後七時四〇分無事帰着。

一〇月一五日(土) 第八回「備後古城記を読む」参加一四名。

一〇月二二日(土) 第七回郷土史講座「わが家のルーツ調べ」開催。講師杉原道彦さん。参加三三名。

同日役員会。参加十名。

一〇月二三日(日) 「秋の古墳巡り」下見。山口副会長など参加五名。

一〇月二九日(土) 「広島文化賞」受賞披露祝賀会。各界から激励・祝賀に駆けつけて下さる。会員の皆さんも笑顔満開。アトラクションでは日舞も。会員の参加六三名。

第九回郷土史講座

『群雄流転』

人物で綴る備後戦国史

今年の郷土史講座もいよいよ大詰め。やはり、この人の話を聞かないともの足りない、と思っている方が多いのではないだろうか。待ちに待った田口会長の登場です。

「応仁の乱の立役者となった山名宗全や、その子で父に反抗して東軍に走った備後守護山名是豊を始め、一介の国人衆から備後守護代にまで成り上がった庄原甲山城・主山内豊成戦国乱世の中で筋目を通そうとした宮政盛、下剋上の覇者山名理興、反骨の武將上原元將、わが故郷の武將古志氏・木梨氏などの生き様、興亡を通して備後の戦国を考えてみる。今までとは一味違った話にしてみました。」と抱負を語ってくれました。

△実施要項▽

日程 十一月二十六日(土)

時間 午後一時三〇分

場所 市民会館第一会議室

講師 田口義之会長

資料代 一〇〇円程度

*今回は多数の参加者が予想されるため、会場を市民会館に変更しました。お間違えのないように。

新入会員紹介

会員数二百名突破!

皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

十二月徒歩例会

熊野町の史跡巡り

初冬の熊野盆地に

戦国の面影を訪ねて

中世「山田郷」と呼ばれた熊野町で活躍した渡辺氏・宮氏の残した史跡を見学します。宮氏は室町時代、山田郷の北部を支配していました。渡辺氏は元草戸にいた豪族で、戦国時代初頭、越中守渡辺兼の時に、宮氏の勢力を追い、この地に本拠を構えました。今回は彼らの興亡の跡である「一乗山城跡」「軍端の古戦場」「常国寺」などを訪ねます。詳細は黒木日出夫さんの「熊野町へのお誘い」をお読み下さい。

△実施要項▽

日程 十二月四日(日)「小雨決行」

時間 午前八時三〇分

集合場所 福山駅南口「釣人の像」

講師 田口義之会長

黒木日出人(熊野文化連盟)

参加費用 五〇〇円

(現地までの往復交通費は各自負担)

受付開始日 現在受付中

定員 六〇名(当日早朝は定期バスの運行がありません。臨時バスを出してもらいます。参加希望者は必ずご連絡下さい)

井伏鱒二の世界

十一月九日〜二七日、「ふくやま美術館」において井伏鱒二追悼一周年事業『井伏鱒二の世界』が開催されます。自筆原稿、書画、文化勲章など遺品を多数展示。郷土の偉大な文学者の足跡に迫る特別展で、観覧料は三〇〇円。会員の皆様のご来場をお待ちしているとのこと。

神谷・田口両氏

文化連盟理事に就任

神谷和孝名誉会長と田口義之会長が、本年度より文化連盟の理事に就任しました(任期二年、四月一月付、五月二五日の総会で承認)。備陽史探訪の会の代表として活躍していただけると思います。

忘年会日程決定!

恒例の忘年会が十二月十七日(土)「サンピア福山」で行われる事が決定しました。詳細は次回案内でお知らせします。お楽しみに!

編集後記

今回は大幅に予算超過。記念号なので勘弁してネ。

備陽史探訪の会事務局

☎七二〇 〇(五三)六一五七

福山市多治米町五一九一八